令和３年度第１回横浜市創造界隈形成推進委員会会議録	
日　　時	令和３年7月14日（水）10時00分～12時10分
開催場所	ＷＥＢ会議形式（事務局設置：横浜市役所18階共用会議室さくら16）
出 席 者	野原委員長、六川副委員長、遠藤委員、岡本委員、菅野委員、重松委員、簑谷委員、山口委員
欠 席 者	日沼委員
ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ	恵良氏、山野氏、加藤氏、池田氏、岡田氏、矢野氏
開催形態	一部非公開
議　　題	１　審議事項 （１）令和２年度事業評価について （２）旧老松会館の公募要項について ２　報告事項 （１）旧第一銀行横浜支店の検討状況について （２）今後の創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について
決定事項	

	【開会】
事務局	○令和３年度第１回横浜市創造界隈形成推進委員会を開催する。
	【挨拶】
	○文化観光局文化芸術創造都市推進部長から挨拶が行われた。
	【事務局紹介】
事務局	○人事異動に伴う事務局紹介が行われた。
	【資料確認】
事務局	○配付資料の確認が行われた。
	【定足数の確認】
事務局	○委員９名中８名が出席しており、委員会の成立となる。
	【会議の公開・非公開】
事務局	○本会議は横浜市の保有する情報の公開に関する条例第31条により原則公開となるが、審議事項（２）及び報告事項（１）については、同条例第７条第２項に基づき非公開とするが、よろしいか。 （了承）
	審議事項（１）：令和２年度事業評価について ＜事務局より説明が行われ、議題について審議が行われた。＞

	野原委員長	○各分科会の議長から説明をお願いする。
	遠藤委員	○黄金町は、コロナ禍での対応が非常に難しかったため、事業内容を縮小した。国際交流事業での中国との交流、短期のレジデンス、あとは集客を目的とするイベント、例えばのきさきアートフェアとかギャラリーを使った展示とかは中止の判断をしている。一方で、体調不良になったアーティストが出たときに未使用のレジデンスのスペースを一時利用するなど、かなり柔軟に対応しており、この１年間をうまく乗り切った点と言えると思う。地元に入り込んだ拠点ということで、コロナ禍で混乱することもあったのかどうかということも分科会の中で意見交換がありましたが、特にそういうこともなく、きちんと運営拠点としての役割を果たせたというのが分科会としての評価です。
	山口委員	○急な坂スタジオの活動を一言で言うと、困難な中で非常に細心の注意を払って安全性に気を配り、また、運営するスタッフへも十分な気配りがあった。その中で新しい試みを含めて非常によくなさっているというところです。先ほどの説明の中で学校プロジェクトを行ったとありましたが、これは実際には、急な坂でのクリエーションを学校に持っていき、生のお芝居を初めて見た子どもたちなどから非常に反響があったということです。つまり、中で行われたクリエイティブなクリエーションが、外部、つまり地域とうまくつながったということで、ここも非常に高く評価された部分です。もう一つ評価したことは、子ども向けの事業がなかなか難しかったが、ディレクターが最も適するアーティストを自ら探し出し、そのアーティストに企画をお願いし実施した、そこも１つステップアップした点と考えています。
	簑谷委員	○BankARTは、本来、令和４年３月までのところを、この３月に令和７年３月末までの３年間の延長をしました。昨年度の事業の振り返りでは、総評にあるとおり、概ね評価できるという声が多かった。特に財務面では、コロナ禍の中、積極的な助成金の獲得に動き、市の補助率を昨年度の77％から67％と10ポイント下げているという点は非常に評価ができる。創造性では、川俣正展、Creative Railwayとの連携、槇さん、村野さんの建築展など、分散型かつ公共空間も活用した展開を行うなど、面的で印象的な動きは評価ができる。また、長期アーティスト・イン・レジデンスの渡辺篤さんが横浜文化賞文化・芸術奨励賞を受賞するなど目に見える成果も出ているあたりが評価のポイントになった。それから、海外交流とかスクール事業ができなかったとか、コロナの影響が出てきているというのはやむを得ないと思いますが、海外とつないだオンラインでの展示制作などにも取り組み、可能性を広げたと分科会では評価しています。コロナ後もデジタル活用は有用と思われるので、さらに検討を深めてほしいという意

		見もありました。今後、KAIKOとStationという２拠点体制になっていくわけですけれども、創造都市のビッグピクチャーみたいなものの中で、市の動きであるとか都市軸なども意識しながらさらに活動を進化してほしいと。他にも、企業との連携はもちろん、ソーシャルビジネスといった新しい領域との連携などもぜひ模索してほしいという意見がありました。
	六川副委員長	○旧第一銀行は、準備期間の短い中、また１年間というテンポラリーな期間ではありましたけれど、非常にうまく活用していただけたと思っています。特にM meets M、それと川俣正とトリエンナーレと連携した展示等々については、非常に多くの市民の方々に楽しんでいただけたと思っています。新市庁舎が隣接に移転したということで、施設の重要性、ポテンシャルがますます出てきていると思っています。この施設の将来に向かっての使い勝手の問題、あるいは課題がいろいろ出てきていますが、ぜひ次期運営団体の選考にもこの点を生かしていきたいと思っています。
	菅野委員	○象の鼻テラスは、ほかの拠点と同様に、このコロナ禍においての事業運営、特に不特定多数の方たちに対して施設を開いている特性上、対応が大変であったかと思います。そのような状況でもなるべく継続して様々なイベントを行いながら、マニュアルをきちんと充実させ、きめ細かな対応をすることで感染者を出すことなく運営できたところは評価できます。それともう一つ、ほかの拠点と違って市民参加型プロジェクト、あるいは施設の特性というものがますます差異化していて、そういった中でFUTURESCAPE PROJECTであるとか、新しい事業のやり方を模索されているところはやはり評価としては高い点です。それから、象の鼻テラスを飛び出し、鶴見小野でいわゆるコミュニティアートという新しいプロジェクトにチャレンジしているところも、コロナ禍でワークショップができないなどの制限はありましたが、可能な限り継続しようという意思を持って活動されてきており、こういったチャレンジングな精神が、安定した運営に加えて、委員全体から評価されていたところです。他方、施設の老朽化も見受けられるということ、それから、こういった未曽有、あるいは有事が起こるときのリスクマネジメントに対するマニュアルを、象の鼻テラスだけではなくて拠点全体でさらなる共有の必要があるのではないかということも話として出ました。
	野原委員長	○THE BAYSは、民間のノウハウもあり、かなり早い段階でオンラインへの切り替えとかを民間のスピード感で行うことによって、事業の継続や発展ができたことは、評価できる点なのかと思っております。また、例えば会議室がこの状況で使われにくい状況になっているかと思いきや、ある一時期、テレワークやオンライン会議の需要に応じて逆に利用を促進するといった時期もあり、臨機応変に活用ができ

		ていたかと思っています。課題としては、この拠点の２つの大きな方針の一つに創造産業の集積促進があるが、まだ具体的なアウトプットや出口が少し見えにくいという部分で、これから創造産業としての役割をどうやって示すことができるかというところも課題かなと思う一方、委員からは、運営者のみならず、行政とともに並走しながら探っていく必要があるのではないかというご意見もいただいています。いずれにしても、全体を通じて創造産業の発展をどうやったら打ち立てていけるかというところは引き続き課題となっていると思っています。もう１点は、地域のにぎわい創出とか、地域での活性化に寄与する部分ですが、『コミュニティボールパーク』化構想や横浜スポーツタウン構想になるかもしれませんが、地域全体を含めた広がりある展開というのも企図されていたと思いますが、この点を強く意識して、もう少し見える化、発信などができるとよいという意見もありましたので、行政とも連携した発信といったところがより求められていく段階にきているかなと思っています。 ○今回は各拠点のディレクターに参加いただいているため、補足があればお願いする。
	山野氏	○一つは海外アーティストがリモートになり、何回かやってみましたが、最初は相当難しかったです。リモートを前提としない状態でアーティストを選んでいたというのが最大の課題だったのですけれど、それからリモートに切り替えたので、作品内容も相当変更してもらった。それと、元々黄金町にいるアーティストの交流も工夫してやってみようとしたのですけれど、対面で会ったことがない、直接一緒に何かをやったことがない人たち同士でいきなり交流しなさいというのも、これも相当難しかったようです。もう一つは、アーティスト支援について、かなり多くのアーティストが経済的に難しい状態に陥りました。一部のアーティストはレジデンスも中断しなければいけないという人たちもいましたし、アルバイトそのものがなくなるというような人たちもいました。それで家賃の減免とか、寄附を募って、アーティストの作品を買い取るとかそういうことをしました。他にも、地域との連携はほとんどできなかったと思います。地域の飲食イベントと一緒にやることで集客力を高めるということをこれまでやってきたのですが、集客をしてはいけないということもあり、できなかった。
	加藤氏	○まず劇場が開かないであったり、開いたところで公演が途中で中止になってしまったりと、舞台芸術業界全体にとってかなり厳しい１年でした。急な坂スタジオとしても利用率が下がり、かなり厳しい中で今年度を迎えています。今年度も元どおりにはなっていないですし、この先もまだしばらく舞台芸術は厳しい状況が続くかなと思っています。その中で、どういった形で稽古場がアーティスト及び作品

		を見に来てくださる方を支援できるかということを考えながら経営していければと思っています。昨年度一番大きな成果だったのは、Creative Railwayで行った「ききみみ」という音声コンテンツを横浜高速鉄道が大層気に入ってくださいまして、現在も広報ツールとしてお使いいただいています。劇場に行けない１年だったからこそ、劇場ではない場所でどうやってアートを届けることができるかということを実際にできたので、とてもよかったなと思っています。また、５年前からずっと大きな悩みだったクリエイティブチルドレンは、ようやく子どもたち向けのプログラムを進行し始めており、先日１回目を行った際は、子ども以上に同行した親御さんたちがこういった機会をすごく求めていらしたことを実感したので、クリエイティブチルドレンという言葉にとらわれずに、親子向けであったり、お子さんが参加している間に親御さんだけ別のプログラムを進行させたりなど、これまでアーティストに対して行ってきた支援を広くいろんな方に体験してもらう機会を増やしていければと思っています。
	池田氏	○コンテンツについて力を入れる部分は入れてやってきましたけれど、BankARTにはフレームの問題がずっとついて回っている。昨年度Stationが安定して、それからKAIKOという新しい場所もスタートし、ようやく形ができたということで、我々としては引っ越しとか立ち上げとかのほうに本当は時間をつかっており、これは全体の中でいうと半分、３分の１ぐらいの仕事ではないかと思っているぐらいです。我々の場合はずっと17年間それをやっているなという印象で、ちょっと息切れしそうなくらいしんどいなと思っているところもあります。決してそれを嫌だと思ったことはないですけれども、つくったところの財産が消えていってしまっているという感覚がすごくあって、いろんな意味でもったいないなと思っています。 1963年から六大事業の計画に入って、それからほぼ60年で完成した今の横浜、その流れの中で創造都市構想が生まれてきて20年、そろそろ次の構想を持って、横浜市の大きな構想を持っていく、都市計画としての大きな、50年計画、100年計画の起点になるようなことをそろそろ本当にやり出さないと、今はモラトリアムでまだ走り過ぎていて、何だか大きな先が見えていないような気がしてなりません。
	岡田氏	○象の鼻テラスは、創造界隈拠点としての活動だけでなく、市民や観光客の皆さんのための憩いの場であり、ある種避難所のような機能を持っている、そんな施設でありながら、閉館せざるを得なくなった状況ということに非常にショックを受けました。その後は、万全の感染症対策をしながら、二度と閉館しないという決意に基づいて、安心安全な運営を心がけています。休館中も、せめてものという気持ちで、医療従事者の方々に向けたブルーライトを展開したりしました

		けれども、大変苦しい２か月ぐらいがあったなということを思い出しているところです。我々は、とにかく大きな公共空間が広がる中にある文化施設であり、無料休憩所であり、観光地でありという非常に複層的な意味合い、ミッションを担うような場所でありますので、場の特性をうまく生かしながら、公共空間の新しい活用の仕方であるとか、国際交流の新たな形であるとか、コロナ禍だからできることというのもたくさん発見しました。そういったことをアーティスト、クリエーターの方々とともにこれからも実践していきたいと考えています。とりわけ、アーティスト、クリエーターというのは、市民活動を促進していく上での非常にいい伴走者になり得るのではないかなということに改めて気づきました。これまでもそうなのですが、参加体験型の事業を老若男女幅広い方々に向けて、アーティストとともに実践していくことの意味を確信しておりますので、継続していきたいと考えているところです。
	矢野氏	○THE BAYSとしては、当初は野球のイベントと連携させて知名度を上げるというところと、今まで館中でとどまっていた活動を館外に展開していくということを目標としていました。コロナ禍の中で、私たちも野球が開催できないなどかなり打撃を受けました。これが社内でのTHE BAYSの役割を見直すきっかけとなり、これまではまちに根づいていくというところで、多くても50人ぐらいしか集められなかったイベントを、４月の段階ではオンラインのイベントに切り替え、これまでのコンテンツと少し変えて、例えば野球の試合がない中でどのように野球を楽しんでもらえるのかとか、コロナ収束後にベイスターズや横浜のまちを最大限に楽しんでもらうにはどのような観光プランができるかということをテーマにしてファンの人を巻き込んでいくことで、これまでは絶対に参加していただけることがなかった日本全国の方や海外の参加者というところも含めて、200人規模のイベントを継続的にできたというところがすごく大きかったと思っています。当初予定していた形とは変わってしまいましたが、ファンの人たちと一緒に横浜のまちとか、我々が掲げている横浜スポーツタウン構想に近づくためという視点では大きな意味のある１年になったと思っております。あとは、やれることというところはだんだん形にでき始めているなというところはあるものの、どう分かりやすく配信していくかとか、どう広報していくかというところはまだまだ課題が残るなと思いますので、そこの活動をしていきたいと思っています。
	野原委員長	○ここから意見交換に移りたいと思います。
	恵良氏	○全体をお聞きして一番感じたのは、皆さんがすごく頑張っていらっしゃるので、今度は個々ではなくて創造界隈拠点の活動全体を何らかの形でトータルにお伝えする機会が来ていると思いました。この

		１年の中でいろいろな実験やら体験、発見をされていると伺いましたので、創造界隈拠点はこれだけの構成でこんなことをやっているという全体像をお見せする、そんな努力をする時期かなと思いました。もう一つ、私が所属する財団としても、こうした取組とか成果を踏まえて、財団の、特にＡＣＹでできることもあると感じましたので、財団の活動の中で考えていく機会にしたいと思っています。皆さんとの連携を強めていくとか、あるいは協働とかいろんなことも考えたらいいなと思っております。そういうことも含めて横浜市の皆さんとも相談させていただければと思います。
	山口委員	○ＡＣＹの件、私の記憶に間違いがなければ、渡辺篤さんがフェローシップを受けていて、急な坂で活躍しているアーティストの中にも何人もいます。そこを私たちがちゃんと自覚して、認識していくことから始められればと思います。
	菅野委員	○創造界隈拠点共通のウェブサイトはありましたでしょうか？横浜市文化観光局のウェブサイトは見たことがありますけれども、例えば、そのサイトからリンクで各拠点に飛んで、拠点の全体像が見えるような仕組みがこれまでありましたでしょうか？
	事務局	○横浜市のウェブサイト上にはありますし、そのほかに横浜市芸術文化振興財団さんの創造都市横浜というウェブサイトでも各拠点へのポータル的なものはあります。ただ、やはり創造都市横浜そのものもさらに多くの方にアクセスしていただかないと、ポータルとしての機能が十分果たせないというところはあるかと思いますので、まさに先ほどのお話のとおり、財団、市が一緒になって、拠点の皆さんとどうやってより発信力を高めていくような仕組みがつくれるかというのを引き続き検討していきたいと思います。
	菅野委員	○Creative Railwayのように具体的な事業連携によって、拠点全体をもっと可視化していく事業を今年も考えられているということなのですが、すごくいい機会だと思います。そういった連携イベントなどを通して、それぞれ発信力を高めるのと同時に全体としての発信力を高めていくということ、広報的な面で見せ方をもう少し工夫していってもいいのかなと思いました。それは、恵良氏がおっしゃっていた連携しての全体の見せ方、やはり次のステップをこれから考える時期にあっては重要になってくるのではないかと思われました。
	野原委員長	○何点かあるのですが、今回拠点のディレクターの皆様からご意見をいただくと、コロナ禍において、やはり結構大変だったというところが生の声として伝わってきて、ぜひどういうサポートとかができるか市の皆様でもお考えいただき、引き続き各拠点と情報交換しながら探っていっていただきたいと思いました。２点目に、この状況下において本当に新たな発見というか、取組が各拠点で行われていて、例えば黄金町では京急さんの参加、急な坂では音声を使った「ききみ

		み」、学校との関わりというのも、そこでもいろいろ新しい発見があったようにお見受けしました。コロナ前からありましたけれども、象の鼻のFUTURESCAPEも市民との関わり方ではすごく画期的なプロジェクトだったりと、それぞれの場所で、この２～３年で次を見据える非常におもしろい展開が出てきている気がしまして、ぜひさらに飛躍したり、発展したり、続いたりできるように、これもうまくすくい上げて魅力を出していただきたいですし、この辺も改めてパッケージングしながら、うまく連携発信できると、それぞれのところで相当おもしろいことをやっているなというのが本当に見えてくると思いますので、ぜひそのあたりのサポートを今後も検討していただきたいと思いました。あともう１点が、池田氏からもありましたけれども、創造界隈のいろんな拠点をマップしようとすると、３年で毎回変わってしまうというか、常に同じ地図を描けない。15年続けてきた創造都市の取組というのが地域の中でどれだけ財産になって落とし込まれていくかという観点で、改めて見直すこともすごく重要です。ここで築いてきた成果とか価値を次世代にちゃんと受け継いだり、発展したりできるのかということで、それぞれあるものをどう見るかというのをちゃんと見ていただきたいと思いますし、まさにいろんな方々が入ったことによって価値が上がってできた資産とか、なかなかそれがちゃんと次に受け継がれてなくて、プロジェクトで終わってしまうということがすごく多い気もしますので、ぜひこれを積み上げていくことで横浜の価値が上がっていくというような未来像も描きながら検討していただきたいと思いました。 ○では、質問、意見がなければ、審議事項（１）については了承でよろしいか。 （了承） ＜拠点ディレクター退出＞ **審議事項（２）：旧老松会館の公募要項について** ＜事務局より説明が行われ、議題について審議が行われた。＞ **報告事項（１）：旧第一銀行横浜支店の検討状況について** ＜事務局より説明が行われ、議題について意見交換が行われた。＞ **報告事項（２）：今後の創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコハマを考える」について** ＜事務局より説明が行われ、議題について意見交換が行われた。＞
	野原委員長	○ここまでの説明について、質問や意見はあるか
	菅野委員	○国際ネットワーク強化のところに、創造界隈拠点の名前がはっきり

		出ていないというところが気になりましたので、ぜひ入れていただければと思います。それぞれのネットワークがアジア各国、世界とつながっているので、名前を明示していただければと思いました。
	遠藤委員	○大きなところはこれでいいと思うんですけれども、例えば創造都市はこれから何を目指すんだというご意見はこれまでもたくさんありましたよね。それに対しての答えになっているのかという目線はやっぱり必要になると思います。これまでと変わっていくのか、継承していくのかというところが明確に伝わる必要があるのではないかなと。最終的にコンセプト化するということで、そのコンセプトが、多分新しいうまい言葉が出てくると、ああ、なるほど、次はこれを目指していくのかということが明確になるでしょうし、そこが実はすごく分かりにくいコンセプトだと、では結局何を目指すんだといところがうまく伝わらなくなるおそれがあって、この辺の作業にちょっと期待したいところだなというのが１つあります。その上で、既存事業を強化しつつ重点プロジェクトを加えていくということで、全体として見ると拡大していくような感じで、既存の拠点の皆さんは結構疲れていて、これまでの事業を取捨選択するわけではないけれども、絞り込むところは絞る、強化するべきところは強化するということの指針になるような考え方が結構必要な気がします。そこが明確になっていかないと、１つの拠点を回すことがまたすごく大変になって、では創造都市は何を目指すんだという自問自答がまた始まるおそれもあるかなということが気になりました。
	事務局	○コンセプトについては、「クリエイティブシティ・ヨコハマのビジョンだ」と多くの方々が分かるような表現を引き続き検討していきます。また、目指すべき姿を実現するための具体的な取組については、今後10年間を見据えて、主要な取組イメージを資料に記載しましたが、具体的な創造都市施策については選択と集中を意識しつつ進めていく必要があると考えています。先ほども創造界隈拠点全体の役割の検討などの話がありましたが、目指すべき姿と各拠点の特性などを踏まえた中で、メリハリをつけた取組の方向性の検討ができればと考えています。
	重松委員	○やはりコンセプトが見えにくいなと思っていまして、これから目指す姿というのが一言で言える必要があるなと思っていて、例えば前橋市だと「めぶく。」という一言なんですね。人がめぶく、土地がめぶく、産業がめぶくみたいな感じで、「めぶく。」という言葉に何か全てが見えてくるというか、これからやっぱりデザインとかアートを目指す地域の活性化をしている行政はすごく多いので、差別化をちゃんとしていかないと、横浜市としての特性とかが見えにくくなってくるのかなと。地域活性化はどんどん進んでいるので、いろんな小さなところでおもしろいことをやっている行政がたくさんあって、

		その中で横浜市がどれだけ魅力的なことをやっているよということを発信できるかがこれからの勝負になるかなと思うところでは、やはりビジョン、コンセプト、それから、それに基づく戦略、それに基づくテーマというような活動が、全部つながっていくような感じの大本になる考え方というのが一番必要になってくるのでと実感しています。
	六川副委員長	○クリエイティブシティの活動を通じて、確かに交流・活動の機会が増えたり、あるいはネットワークが強化されたり、アーティスト、クリエーターの集積ができてきているんですけれども、やっぱり一番の問題は、こういう方々がちゃんと横浜で仕事ができるかどうか、仕事場が横浜で提供できるかどうかが非常に大事だと思うんです。アウトプットをしっかりすることによって、横浜に行ったら仕事になるよというような形になればもっともっと人も集まってくるだろうし、横浜にはクリエーターの人たちが参加できるような要素、コンテンツがいっぱいあるわけですね。その辺をコーディネートできるようなことが考えられるといいなと思っているのが１つ。それから、イルミネーションは横浜の業者を使っているわけではないんです。横浜の中で、横浜のクリエーターの人たちにそういうものが提供できるような環境づくりも必要ではないのかなと思っています。
	野原委員長	○私も郊外まちづくりなんかをやっているんですけれども、郊外で実際、相当クリエイティブな活動というのはいっぱい行われていたりしまして、元をたどると、実は創造都市から広がってきたクリエーターの皆さんが活動されたりしているので、そういうことも含めてうまくやっぱり見せられるといいなと思っています。 ○これで報告事項は以上になる。 ＜重松委員から挨拶が行われた。＞ ＜事務局から議事録の確認依頼や今後のスケジュールなどについて、事務連絡が行われた。＞
	事務局	○これをもって、令和３年度第１回横浜市創造界隈形成推進委員会を終了する。委員の皆様、長時間ありがとうございました。
資　　料	① 次第 ②［資料１］委員名簿 ③［資料２］前回議事録（令和３年３月24日開催分） ④［資料３］令和２年度事業評価シート ⑤［資料４］旧老松会館の公募要項について ⑥［資料５］旧第一銀行横浜支店の検討状況について ⑦［資料６］創造都市施策の方向性の検討「これからのクリエイティブシティ・ヨコ	

	ハマを考える」について
特記事項	